義の輩おるにその英雄をむざ〳〵と酷吏の手に捕へしめ愛苦の獄舎に繫んいいと惜むべきことにおそいかゝるも和殿の望みに應じ秘法を傳して得さすべし併し是等い尋常の祈禱の類にあらざれば常に他人の出入せぬ土藏か或ひい清淨の別室を繕らひて法の如くに壇を築き五器八器華水供れよび護摩の用意をせずばならずその他に五人の人形を黄金ふて造るなりすべて夫等い整ふべき歟と云れて主個い頭部を擡　平「清淨の別室とてい設けて出来ぬともあらねど今さし當りし急場おきば土藏を清め申すべきがその黄金の人形い急に整ひがたからんと之のみ心痛仕まつれりといへば剛驗打領き　剛「然なり斯る急場のことゆゑ人形とてい出来まじくよつてそもい黄金を箱ふ封じてこれに代その人の姓名を記しれらば宜るべしその他の器物い清淨の器をさへ購めなむそれにて事い充分なり勿論造れる人形い是等の人の歸るまで壇上に祭りおき當家へ無事に歸着せば速かふあきを解元の如くなすともよしト料紙を出させ筆をとり入用の品々を一々に書記し平太夫にそれを渡し明朝迄に整のへられト吩咐おきて臥房をとらせその夜い一泊をしたりけ

る徳て次の朝となれば三太夫い剛驗の云たる品々取揃へあれを坐敷へ運ばせくまた黄金の人形い何程の入用にやと問む剛驗打領き　剛「されば其事をりまづ金一兩を一月とたて一ケ年間その人を封じ人と思ひ〳〵一人に付十二兩十ケ年間隱さんと欲せば即ち百廿兩斯のごとくの算用なれば身の望みに任すべしといふに主個い心得て六百兩の小判を出し　平「願くば五人の人を十ケ年間隱させ給へそのうちに世も代りて咎むる人もあるまじトいへば剛驗左ありと返辭六百枚の小判をば五個に分ちて紙に包み拵へさせし箱ふ納め三太夫の見るまへにて四方を楚や釘打して一個〳〵にその者の姓名及び年齡を記すに當りて喜十郎にいまだ逢しことなければ名さへ年齡さへ知らざるゆゑ开い何某と記させたり此間に下僕に命じ土藏の内を掃除させ準備全く整ひしかば剛驗い湯ふいりてその身を清め供の下部にもたせ来りし兩掛より用意の衣裳を取り出し紫の差貫をいき淺黄の淨衣を着し古金襴に金々具の袈裟をかけ兜巾を戴き手にい威羅高の珠數を持まづ土藏へ至り清祓ひなりとて真言を呪し印を結び種々の法を行ひその後法の如く

壇を築き五器八器華水供まで悉くこれを飾り上段まかの五人の形代を祭り護摩供の用意出来せしかば剛驗は平太夫まうち對ひ剛「今日の午の刻より明日の午の刻までは假令いかやうの事ありとも決して土藏へ入を許さず修法の間は食事を斷ぜば必らず是等の用意もいらゞト固く家内を誡しめて土藏へ入りて鈴を鳴し經呪を誦しつゝ護摩を焚まその煙りは風窓より渦巻たつて立冲るはおまさま秘密の修法ならめト平太夫は頼もしく思ひてその夜は我身も睡らずをり〳〵土藏の外面を巡れば内には鈴の音高く護摩供の煙り立あがれり恁く翌日の正午過まで剛驗は出来たり修法の濟しを告るゆゑ平太夫は大いまに喜び謝禮まとして五十兩の金を出せば一二度これを辭せしも後には受て剛「好意に任せ暫く預かりこの金ゆて婦人をば親許へ送らるべしト尚ほも後の供物および燈明などの指圖して婦人と下部を召連て加賀見の許を辭し去りて何國ともなく出行たり

第四十四章　剛平夫婦途中ふ小嘍羅等に遇ふ

抑この妙奇院剛驗といふ者をいあなる者ぞと尋ぬるに這ねかの川北剛平ふて向に勇僧大善に山田峠の棲家を追れお富侶俱山路を傳ひ辛くも危ふき場を遁れ九州へ逃ゆきて暫時かの地に潜伏しが思ねしきともおきゆふまたまた並に惡意を發し其身以前京都に在て少しく修驗の道を學びこれを奇貨に騙衒をなさんとれ富とも相談なし修驗者の衣服を製へれ富を連く諸所を歩き或時ね妻と稱し或時ね姪と号し又ね祈禱まさね色情と種々の手術を運らして諸方に於て惡巧みを働さながら上方へ登り来れる途中に不斗津山の町稍盡處で平三郎れ雪等の物語りを木蔭ふて殘らず洩聞き大いに喜びこれ僥倖の金の夏と遽に支度し加賀見へ到り詞巧みふ偽ねり告平太夫を欺むきて六百兩と五十兩の大金を奪ひ取り龍野の城下を立退て姫路の方へ赴むかんと一里餘りも歩みしが或茶店の座敷に通り酒食を命じて休息おせれ富れ四邊を見廻しつゝ富「首尾よく金ね手に入さかエ　剛「夫やア決して心配なしだ形代の六百兩ね乃公の懐中へ御安座サそのうへ誰禮の五十兩ね即ち並に御持參だねまづこれだけの金があらば半年や十月ねれ大盡此處で乃公の

考へぢや廣山伏もモウ並等でれ廢といたせしてこれからね山ふしの武士とおり久しぶりにて京都へ赴むき歡樂の活計とやらふヨ　富「爾サそれね何より結構だがねやく大坂か京都までゆかぬときね萬一巧みのモクが割追手の者てま来たら大變トいふを剛平うちわらひ　剛「ナニそのことね大丈夫だ充分乃公の辯口で瞞着かしてれいてあれば十日や廿日ねこゝろもつくめいしうし油斷ね大敵といへる譬へもあるとゆふ小心するに如ねふしト密々み談合し茶屋へ酒食の價ひをねらひその家を出て姫路に着し宿りを索め修驗者の姿たをやめて元の如く旅の武士に扮飾て明石の方へ赴むかんと加古川の邊まで到ると堤のうへに二三人の乞食体の者が集まり何歌譚をふしをりしが不斗剛平と顔を見合せ　甲「オウれ前ね首領　乙「姉御も一緒ふ　丙「コリヤ能處で逢やしたトロ々に、いふ面を眺めて夫婦も俱に驚き　剛「爾いふ其方ね手下の奴等日外山田峠に於て思ひがけなく坊主のため捕へられたと思ふたに何して此處にその姿で　甲「爾サ那とき強力坊主に捕へられてうの姫路へ引渡されたが入牢のね一月ばかりで二百の杖で追放となつたれど何分にも

一文おし　乙「そのうへ元の家業を繁がうゴも器具ハなく僅っ計りの白晝蔦や不在宅を狙つて歩いても充分酒も飲をいし安女郎も買れねへ　丙「見れば首領も姉御までが千石取のその風体定めて旨味儲けがあつたか　甲「以前の好誼ゴ乃公達を　乙「どうう教ツてお呉おせト云れていま更振棄られも剛平ハ前後を見るに僥倖往来ゑ途絶てあれば　剛「乃公も久しく苦しんだが漸う斯を身になつたもツと昨日今日のとだ併し其方等が爾いへばまた何とか仕様ゑ付うか其身の姿ぢや仕方がねへ湯へでも這入て髪も結ひ一枚着替て明石の城下の本町の京屋といふ旅宿へ翌日ハ来るがよいト懐中より金を出し一人前ゴ五両づゝ渡せば三人ハこれを受取り　丙「そんなら首領翌日の朝ハ本町の京屋へゆくから　甲「姉御もよろしく頼みますぜ　富「アイそれハ此方ハ承諾だがお前方ハその金を媚妓ぐるひにつかひハたし身姿もせずゴ来られると此方の顔がサスのだからよくその事を呑込で詞遣ひも温呼う改めて来るがよい　乙「姉御ゑ其處ハ氣遣おしだ幾許乃公に締がなくても今夜なんぎア真面目だ　丙「翌日ハ京屋へ尋ねて往ても首領のをんのと云しねへ旦

那ゴ異様百も承知だ　剛「そを其方が辛抱をりゃ立派な人ゴ爲て遣ふよ往来人のねへうちゴ些もねやく驛へゆき身姿の用意をするがいゝト云れて三人打領き　甲「そんなら首領オツト旦那　乙「異様いづれ明日ハ　丙「御旅宿へ參りまして　甲「拜願を　乙丙「いたしませうト饒舌立て立去つたり後見送りて下部の市助　市「親方那ゑ大勢を京都へ連てゆくれ積りうト訝かり問れて莞爾と笑ひ　剛「目的かなくちゃ連も爲ねへが些と乃公に算段の附たとがあるからサ　富「その算段とハどんなとだへ　剛「それハいづれ宿へ着き緩々三人相談しやう　市「いかさま此處てハ譚も出来めへサアハやく明石の城下へ剛「ア、大分暇を取せやがつた

第四十五章　剛平支黨と謀て窃に諸侯を欺く

茲ゴまた大坂の或藏屋敷に一泊されし南海の一諸侯ありうの名ハ少しく憚りあれバ故意と省きて記さねども御領も多く威權もある成吉君と申を方ゴて御年齢いまだ三十ゴいたらず血氣盛んの主君なり々るが正午飯すぎに邸

を立れ御歸國の途中なるにぞ住吉の大神へ御參詣あるべしとて行列を正されて徐々とうたせらる當日は殊に空晴くいと麗かなる天氣なれば成吉君は御輿を止られ金寢輪の貝鞍れた真紅の厚總かけさせし三才駒の逞しきに馬上ゆたかに打乘り給ひ住吉街道を歩ませられ既に廣田の社も過て南の方へ赴むらるゝと一丁許も向ふにあたりて何歌物を詩そふ樣あり雙方とも武士と覺しく此方は一人の婦人を具し連目ながらも立派に見えたり那方の武士は浪人らしく四人同伴にて旅裝束始の程は兩方より口詩ひの体ありしが浪人と思ふ者が四人一同に刀を拔連れ一人の武士の四方を圍み斬てかゝる樣に成吉君の御先倶は暫時列を和へさせ左右ふくは進まざりしのせき此方の武士はこれに少しも驚く体ふく打來る白刃を右左り身潛けて飛鳥の如く身を働かして刀も拔ら腰にさしたる鐵扇もて丁々と受止めつゝ瞬く隙に四人の白刃を地上へ破落零と打落し怯むところを鐵扇驕し流々と打据ゑゞら一聲高く呼はるやう　浪「婦人を連し者と侮どり無禮の言詩を發するのとか白刃を閃めかし高貴の方のれ列先を妨げいたす無法の舉動一々生

首引拔べき輩なれども何分にも御大家の御社參きに血汐を織すの恐れあればこの儘に差許さん疾々白刃を鞘ふ納のこの場を立去り申すべしト白眼つけられ四人の浪士は一言の返辭もなく銘々落たる白刃をひろひ鞘にをさめ一散ふ田圃道を横筋違雲を霞と逃失たり此方の武士はこれを見て徐か丹衣紋をかき繕らひお先供の家士の前へ進み恭しく腰を屈め　武「高貴の方の御列先にて止を得ざるとは申せ御無禮をいたせし段いと輕からぬ大罪なれば御法通りの御成敗遊ばされて下さるべしト女侶倶慇懃に詞爽かに述しまゝ自若として扣へしい適れの武士なりと見る人毎に感心せり成吉君は御馬上より此体を御覽ありてお側の近習を近く召され事のよしを問しめ給ふに、近習はこゝろえお先へ駈け行仔細を尋ね馳戻りて云々ありと武士の詞を言上するに成吉君は御扇子にて鞍の前輪を丁と打　成「アゝ適なる業かな舉動武藝と云ひ言語と云ひ萬に拔目のなき男いづくの落士の落はしゝ汝は再び彼處へゆきろの姓名を聞糺し自然主人はおき者ならば予丹仕へすや問ひ試みよト命じ給ひて手綱をうひ繰徐々と乘出し給へばお先は列を亂さ

をに住吉さして歩みゆく以前の武士ゐ傍ゐらゴ蹲踞くお列を拝し御前のお馬の近づくとき屐物脱棄て土下坐をきり地上へ平伏したりける成吉君ゐ馬上よりこの有様を眺め給ひ御機嫌ます〳〵麗しくいと笑し氣ゴ見えたりける程なくお列も通り過ぎお後供の家老もやきしを見て以前の近習ゐ武士ゴ對ひ　近「其許ゐ何國の御藩でその姓名ゐ何と申をぞ開を承ゐり參れとある主君の仰に候ふおりト聞てかの士ゐ詞を卑しめ　浪「卑生義ゴゐ定まれるいまだ主君の候ゐねば藩士にてゐれあらぜ若年より　聊の學びし武藝を指南いたし茲ゴ五年彼處に三年と諸國を遍歴仕まつる一所不定の浪人者即ち川村剛之進と呼るゝ者に候ふおりト告るに近習ゐ打喜び　近「開ゐ一段の僥倖なれ實ゐ主君が其許の武藝といたく感賞せられもし浪士ゴて在しおば本藩へ仕へられぜや承ゐり合せよとある御内命を承たれど萬一仕官ふ望みあらば本藩を參られぜやトいふゴ川村大いふ欣喜　剛「這ゐ願ふてもおき仕合せなり未熟の藝を棄給ゐぜば粉骨碎身忠勤を勵み申し候ふべければ尊君より御前お處ゐよしろく御披露下さるべしト述るゴ近習ゐ打領き　近「速かゴ

承諾せられ拙者ゴ於ても大慶至極即ち吾身ゐ大鳴友之亟と申を者今宵ゐ邪の本陣にて御一泊の筈おれば必らず彼處で待受申さん　剛「仰せゴ從がひ其も後刻堺の御本陣へ推參いたをで御座らうト互いに挨拶おし果て友之亟ゐおん列の跡を慕ひて馳行たりかゝる處へ以前の浪人四人連ゴて出來り　甲「首領首尾よくやきやしたゝ　剛「シイ聲がたゝい徐かゴ〳〵

第四十六章　權三大善を誑て土藏の裏に捕ふ

再説勇僧大善ゐ多くの捕手を斬拔々て清記等四人と引別れ備後路へ避たるが豫て別るゝ節母のゝみ來月下旬母一旦ゐ酩々龍野へ集まらんと約せしことゆゑこれを違へぜ第一ばんゴ加賀見の許へ歸り來るゴ平太夫ゐ大善の無事を喜び早々に客間へ請ト一別以來の事を語り他の人々ゐ如何せしやを問へば大善打領き　大「さればなり貧道も其事の心頭ゴかゝりて案ドらるゝのゆゑをもて开を知らん爲歸りたるゴ未四人ゐ來らざるやト夫より向にありしことを殘らぜ告てまたいふやう　大「當寂の子息ゐ作州路津山ゐ方へ立退う

れ清記どゝと喜十郎ハ因幡の方へ赴むきたりまた藤平ハ四國路へ立去べし
といひたるがいづれも當月下旬ニハ是非一度ハ當家へ集まりその後銘々相
譚しく東國か北國へ赴むかんと約したれハ必らず不日ハ便りあらんが貧道
ハ知らるゝ如く性急なる生得ゆゑ下旬と云し詞に背かず遠はやく歸りたれ
ども他の人々ハ今四五日遅るゝかも知まがたしど始終の容子を委しく語る
ニ平太夫ハこれを聞少し心の安堵しかハ酒肴を調理侑めながら向ふ修驗者
奇妙院剛驗ノ来りしことなどよびその神算の的中したれハ之ニ祈禱を頼まし
とて修法のことを委しく告るニ大善ハ倩々聞とり眉振を顰めて大いに不審り
大「汗ハ心得ぬとこそ知らるゝ如く貧道ハ出家の姿ハをしれどもいま
だ口に經を誦せず況んや受し戒行をや一も保しことあらねハ修法あんどハ
習ひもせず素より疎きとあがら秘法を修して人を封じ響ニ知らせぬなどゝ
いふハ魔法丹比し所爲ニて殊ニ斯る法を修るに僅ノ器具を備へれさ
一晝夜の修法とハ餘りニ輕きのみならず黄金の形代とハ旁もつて不審の到
り疾その土藏へ案内せられよ貧道これを一見せんと平太夫を先ニ立て土藏

ニ入て護摩壇の体を篤と打眺めツカ〳〵と走りよりかの人形母凝らへし箱
を手にとり大口開き呵々とうち笑ひ　大「されハこそ貧道の推量に少しも違
ハず其奴ハ全たく贋者なりそノ証據ハいま見せんと両手をもつてかの箱を
グツと摑めハ破落零と毀け中より出づるハ小判ニあらで小石が三個四個轉
び出たり平太夫ハ驚を潰し　平「ヤヽ爾おら渠奴ハ騙衒であつたかそれとハ
知覺で吉味〳〵と六百五十両の金を賊ニ與へし口惜さよと齒りをなして悔
みつゝ飾りたてたる護摩壇を微塵ニ碎き棄さりける大善ハこれを慰さめ大
「向にも御身ニ告し如く幻術魔法ハいざ知らず世の正法ニハ斯のごとき不
思議の奇法ハある可らず然るを知らざるお身ならねど我々の身の上を案じ
られて迷ハきしその虚に乘て盗賊がかゝる巧みをなせしならんト奇妙院の
年齡および婦人の骨格摸様を尋ね暫時小首を傾むけしが　大「倩々おん身の
詞を聞にその賊男女ハ過し頃山田峠の賊塞にて取逃したる剛平お富に郷か
符合するとあれハ自然渠奴が修驗ニ變ゞ當家へ来りしやも知れぜいづれ不
日ニ貧道等ハ再び諸國へ赴むくべきニ其節渠奴に出會あハ此度今回の返報

すべしト云ながら客間へ戻り酒食喫しをるをりから元平三郎の坤兒たりし塩辛の權三といへる者が出来り平太夫に告るやう　權「旦那に一個のお願ひあつて甚右衛門の使ひに參れり开は又別の事でもなく最前甚右の土藏を明しにその中の物陰に畫た鬼のやうな怪物が寢て居るとて家内近所は大騒ぎで種々評議をたてゝ見ても誰も怖れて正体を見究めやうといふ者おく僉後込をする計り其處で私が智恵を絞り日外當家へ来た修驗者が護摩を焚たといふとも忽その焚殘りも灰でも有れば夫を貰て怪物へふりかけて遣たおら定て尊い物に恐れ怪物は逃て有うと思付ての御無心あり卜聞より大善打笑大「權三よそまは貴公に似合とだらの比喩にも云如く下戸と怪物は世に おいとか下戸はあつても化物が此世界にあるべきか大方それは鬼の面うあんぞがあるを見たのであらうといへば權三頭部を掉り　權「イエ〳〵嘘でれ御座りませんモシ疑ひなら御供して御覧にでも入まするトいふ為此方は酒興のうへ　大「オウ爾おら往て見て遣ふと平太夫の止るも肯ぜず權三と侶俱に甚右衛門の許へ到り土藏の口へ立寄れば權三は恐る〳〵　權「ソレ那處の隅

に寢てをりまするト指さし示せば大善は何心なく内に入るを權三は急ぎ土藏の扉を締鍵を楚と鎖しつゝ　權「旨味と首尾よく取籠たから早く城下に滞在さるゝ捕吏の方へ注進して約束通に褒美を貰へと一散にこそ馳走りたり

第四十七章　清記大善を救て平太夫方に集る

偖も大善は權三に欺むかれ土藏の裏に取籠られ後悔すれども詮方なければヨシ〳〵假令この内にをるとも手足は自由あり自然捕吏の来りあば一泡吹せて呉んぞと更に動ぜる氣色もなく窃かに土藏の内を見廻り足場をはかりて錫杖を側へ引付置ながら長持の上へ横に轉び捕吏の来るを待うちにまを〳〵酒の醉を發し我を忘れ〳〵熟睡し雷の如き高鼾を鞠々とおしさるは不敵といふも餘りある大膽の舉動なりけり彼是するうち日は暮て人顔さへ見えぬ頃甚右衛門とは其方なるかと入来りし三人の武士あり偖は權三の注進に捕吏の来れるものならんと甚右衛門は出迎へイザ此方へ也家内へ通せば一人の武士が會釈して　武「最前鹽辛權三とやらが注進いたせし惡僧は何處

ゴをるぞ召捕ためあれ〜三人出張せりまたかの權三ハ當方ゴ用事あり て留おきたれば左樣承知いたすべし夫れゴ就いく其の方の家内ハもべて殘人をるぞみな〜宅ゴ罷り在らバ殘らずこれへ呼いだせいづれ褒美ハ進て の沙汰當座の祝儀を與へなんト聞きて甚右衛門大いゴ喜こび肚裡に思ふや う斯ると扨ハ家内の多きが何よりの調寶ゆゑ悴も親もと云度けれど實ハ 女房とたゞ兩人アヽこんなことおら去年死んだ母公なりと居て呉さら一人 前でも餘計に這入をエヽ忌々しいお仕方がおいト頭部を搔て答ふるやう甚 へイ定に無人の活計にく影法師を除ましたら嫣と兩人の家内なれど此程よ り嫣奴ハ酸ものを好ますし割にハ腹も大いゝら双子でおくバ三個子てあら うト考へて居ところ情願あひなりまするなら腹の嬰子も人數のうちへお加 へおきつて下さりませトいへば女房も二ヂリ出し兩手で腹をつき出しおが ら女「唯今良人が申した通りこの月が四月目ゴ斯おにお腹が大うてね どうやら三個子も知れませぬ御祝儀ならバ親子の者五人前戴きたふト悉に 目のない夫婦に對ひ　武「夫に偽ハりこれなくバ望みに仕せ褒美を遣ふトい

ふよりはやく蹴倒して忽地兩人を縛りあゞ手拭とつて猿轡を楚と噛せて側 にある土藏の鍵を取あげく　清「藤嶋足下ハ土藏を開き和尚を伴おひ來るべ し ト云つゝ表をさし招けば平三郎ハお雪侶俱權三を鄉縛入來れりその隙ゴ 藤平ハ手疾く土藏の鍵を開けばこの時までも熟睡せし大善ハムクと刎起き 傍に置たる錫杖を驚し響さむさる大音あゞ　大「汝等先度の手並ゴ懲ず再び 來りて貧道を搦めとらんとなすとても其方如き小人の手を鄉縛を蒙むるべ き大善坊と思ひをるかト叫びも敢ず打てかゝる藤平ハ身をかわし打來る杖 の先を握り　藤「和尚よ遥り給ふ勿れ我身ハ藤嶋藤平なるハトいへども大善 酔躰を見ば更ゴこれを耳にもかけず取れし杖を奪ハんと詩ふ處へ清記が駈 付　清「和尚精神を鎮められよ我ハ塚原清記おり加賀見加田も茲にありト云 れて大善漸く知り備ハ人々歸られしゥト錫杖曳て土藏より立出　大「おん身 方ハ如何ゴして貧道のこの所ゴをれるを知りく救ハれしやいと不審きこと にこそトいふに清記ハ打頷き　清「この義ゴ就てハ仔細のあれど茲ハ爲事を 語るべき所ゴあらねば後刻ゆ於て緩々と商議をべしト云つゝ加賀見の引立

し權三の繩をとれば大善はこれを見て　大「奴は決して許しがたしと飛蒐るをれし止め　清「和尚の怒りは有理なれど斯る無智の小人を殺すは無益の業なる」此者等は　某の爲を」任せおかまよトいへども大善肯んぜず　大「和殿は事の理由を知らねど止めらるゝも無理ならねど貧道を欺て土藏の裏へ取籠しはべて這奴の計ひなればその生首を引拔ぜば熱たる腹を慰しがたしト再び摑み挫がんと立かゝるを遮ぎり止め　清「吾儕これを禁むるは決して此奴を助くるならぞ斯やうな者」手を下すは我々丈夫の恥るところ宜しく和尚の名代」土藏の裡へ押籠おかば夫丈て報は充分なるに手を下して殺すは無益と頻て權三甚右衛門夫婦の者を引立て縛縛のまゝ捉縛も解ずして土藏の裡へ突き入れ扉を鎖して鍵をれろし鍵は加田に拵さへきせ加賀見の許へ立歸れば平太夫は人々の無事」戻りし体を見て喜ぶこと大方ならぞ早く客間へ請ドゆき速ふ酒宴を催ふしたり

第四十八章

再會を約て八個藩州龍野を去る

登下清記は主個の出せし簡を辭し恭しく形容を正し　清「實に今回は思ひよらぬ吾家」この」る禍鬼より此座」集へる人々へ幾層かの苦勞をかけ僥倖」も今日まで恙もあらで身を遁れ茲」團欒を開きたれど決して安堵の地位」あらず猶敵中」居るも同じそのうへ既に先刻の如く一時吾儕の拙策にて大善御坊を救ひたれども這はたゞ當坐の遁れのみ早晩捕吏ふ聞知られ必らぞ當家へ押來らんかゝれば疾く準備をおし开を避るの分別せぞば臍を噬の後悔あらんトいへば大善打笑ひ　大「うれは和殿の戒心過たり最早この地は他國にして殊に他藩の領地なる」何條多くの捕吏を向ん假令我々一同が當地」居を探り知り召捕へんと致をとも僅かの人數」相違おし三十五十の者共ならば吾片腕」も足べからぞ左のみ心配するとかはトいふと清記は頭部を掉り　清「否々それは和尚が非なり既」龍野の城下には物頭が出張して當家の容子を窺へり开っ最前の權三が白狀せし」て委しく知る抑も吾身は和尚と別れ加田を伴ひ因幡路」暫時姿を隱し居しが約せし期日ふ近づきぬれむ窃か」當地へ歸る途中にて不斗これある平三ぬしが妹を連て戻るふ逢行

細を聞に斯々ありと雙龍齋の上を語り依て四人が打連て當村へ来る路にて
また藤島に出逢たれば銘々別後の事を告和尚に如何せられしやらんと語ら
ふをりゝら權三が遽しく駈来り吾々の姿を見て殊に驚き逃んとするゆゑ平
三ぬしゞ怪しみて忽地捕へて責問れしに渠も始に偽りたれど言語のますま
す濁るゆゑ嚴しく拷問をしさるゆゑ遂に包み隠しがたく曩頃より龍野の
街に旅宿をとりてあれ〳〵の歸るを待を徒士頭園部新左衛門の頼みを受
て當家の容子を探りをりしに今日なん和尚のもてると見認かの甚右衛門
と相譚して斯々と偽にりつけ和尚を土藏へ取籠おきこれより城下へ駈つけ
て園部の許へ注進する途中をりと白狀せしかゞ形のごとくゆゑ計ひて和尚を
救ひ出したりかゝれむ今宵に知らずも翌日か翌々日に敵方の聞知るに必
定ならん然を悟で此儘居るに望んで死地ふ就み比くいと愚なる事にこそ
いへば大善不與氣に　大「さるとのあらんみに何故渠等を殺されざるや渠奴
等をだゞ殺しゞば敵へ告る者もあらじ夫ゞ貧道が打殺さんと云しを固く禁
おき今更渠奴等を懼るゝに近来和殿に似合しからぬと聞て清記に打笑ひ清

イヤとよそれに辯言あり此方の舉動を窺ふ者に懼かゆゑ渠等三人あらんや必
らず他ふ尚あるべし然らば假令渠等を斬ともそれにてよしといへゞあし
吾齋が渠等を土藏の裡へ捕へおきしに畢竟ぞる一時遁れの所爲にして急ゆ
敵へ知らもまじと思へるまでのとゞりかしかゝれば疾く準備をおさん夫ゆ
就ては當家のことゆて敵に既ゆ當家をば我々の所縁と知覺間諜を入しから
に主個のうへがいと危ふし勿論いまゝで一回も當家へ捕吏の来らざりしに
いづまとも我々が戻るべしと知るをもて其時一時ゆ召捕んと故意と當家
ふ知らぬやう事と秘密ゆなしをるも今や一回立歸りてその事を知りしす
へ他國へ姿を隠しゞば最早再び歸るまゞとてその時こそに主個を捕へ人質
とおもに必定ゝれば主個と侶俱ゆ遠くその身を隠されゞば必ず禍災近き
母あらんか然ども當家に舊家といひ資産も多に家なるに一所不定の浪人お
る我々の故をもて離散させんに見るゆ忍びぞこれを思へば一滴の酒も咽喉
を通ゝかたし吾齋の命一個を棄て他を救ひ得る術もあらば武運拙おき清記
の一命に更ゆ惜むことおしト悄然として物語るゆ平太夫にこれを禁め　平一

その義は少しも苦しからぬ素より夫等は覺悟のうへにて内々準備もなしおたれば吾身夫婦はいつまても當地を立退申すべし尤もこれ等を思ふがゆゑ暫て吾身の舍弟なる紀州高野の麓に住む加賀見平五郎といふ者方へ委しく事情を告やりて當地の田地山林も多く他人に賣れささり然れば何時その地を去るとも今は惜きともおもはず主個夫婦は平三郎お雪と俱に乘船して紀州高野へ先に赴き大善と善十郎は但馬路より京都へ出清記藤平の兩人は攝州を經て和泉へ到り一まづ紀州高野なる加賀見の許へ至るべし尤もいづれもその途中は雙龍齋れ駒の在家を尋ね索めんと商議茲に一決してその次の日の未明ころ一同龍野を立去を捕吏れ者は知らざりけん更に追て來らざりける

第四十九章　町田一計と運し清記藤平を生擒

去程に塚原清記は他の人々と引別れ藤平を伴俱に大坂へ來りしがその途中屢々に於て怪しき者を屢々見認人なきをりふ藤葛を顧りて囁くやう　清「和殿は心附かざるや前に明石を過しよりその姿怪しく思はる、胡亂ふ奴が前後ふをるはもしや我等の身上を知りその往先を見認んため付添來る目明しとか犬とかいへる輩にあらんか果してかゝる者ならば此方に於くも尋じめ夫等の或心なるすこそ宜けれと語れば藤平打領づき　藤「如何さま貴君の宜まふ如く吾身も怪しく思ふ者をときゝ見受候へばその手當をなすべしお れどもこれぞ目明犬なりと確と認めしうへならでは迂闊ふ事を發しがたし ト聞て清記は打笑ひ　清「いやとよ假令怪しくとも直ちに此處ふて手を下し其者を捕へもし殺しもせんは宜しからぬ唯々渠等に往先を知られざるやういたものみ夫に就て考ふるに此地より紀州へ赴くには堺ひへゆくが順路お れど故意と大和の道を轉ゞ夫より伊賀路も、しくは伊勢と路を廻ゞて乘船し紀州へもかは自から渠こそ實の目明しと立地に分解べしその時これを捕ふ とも追ともおさば宜りなんト窃の語れば藤平も實ふこの義こそ然るべけれと内々して牒し合せ大坂には足を止めぬ大和路へさしかゝれどこれも故意と順路を過ぬ或ひは廻りまたは間道を種々の道を轉じ上市村へ着いたり

夫より五條へ五里と聞ば茲にて再び商議なすゝ藤平の云る樣「此程より樣々と廻り路をせしゆゑか昨日今日ゝ恠しきと思ふ者も見當らず察するに目明どもの最早倦みて從がひ來ぬか或ひゝ何方かゝ我々を見失ひしも知るべからず然らむ強て伊賀および伊勢へ廻るも無益ゝ似たり併し貴君の尊慮ゝいかゞと聞ば清記ゝ暫時思慮し　清「いかさま足下のいふ如く昨日も今日も訝らしと思ふ者を見認されば或ひゝ足下の詞の通り此方の往途を見失ひ立去りたるも計がたしさるを無益ゝ伊勢路へ廻り便船を索めんとて彼處へ再び見認られゝば勞して効なきのみならず却つて大いゝ害あらんさらば茲より五條へ赴む直ちゝ高野へ到るべしト相譚ゝして路と急ぎ五條の町へ着しつゝその夜ゝ茲ゝ一泊せしが此三四日ゝ兩人ともに晝夜更に油斷せず旅宿を索めて枕らゝ就ど迭みゝ半夜ゝ驚まず清記が眠れば藤平ゝ起直りてこれを守り藤平が驚めば清記ゝ代りて心を配り假令寢るゝも帶を解ず佩刀を抱きて臥をりしがその夜ゝ互ひゝ心安堵多餉も殺々食をはり此程より或心のためゝ谷もおさゞるゆゑ兩人共ゝ湯ゝいりて勞れを休めて枕につゝ

るが少し安堵の思ひをせしと日來の勞れの發したるか兩人ゝ忽地熟驚して前後も知らず臥ーたりゝる茲にまさ監察方ゝ町田金之亟ゝ向ふ清記大善等が老臣熊田采女を害し剩さへ獄舍を破り囚人藤島藤平を奪ひ出して大勢の捕吏と殺めて逃去りたれゝ從士頭園部新左衛門と申し合せ各々數多の組子を從がへ兩手に分れて此者等の蹤跡を吟味なしたるが園部ゝ少し手がゝりありとゝ龍野の城下ゝ滯在するゆゑその身ゝ明石の城下ゝ來り密々穿鑿をおしをりしゝ或とき一人の目明しが藤平と見認しとて窃らゝ注進せしをもて町田ゝ直ちゝ下知を傳へ夫々ゝ手配ほるに素より兩士が召連し組子はすべて清記等が面を知らぬ者を撰めゝ或ひゝ商賈または農夫と種々ゝ身を扮飾せ兩人ゝ前後ゝ添しめて透を謀りて捕んとすれども疾く清記藤平等ゝ之等の情を探り知り晝夜戒心なを樣なるゆゑ町田も容易手を下さず故意と兩人ゝ油斷をさせんと一兩日ゝ組子を制し遥の後より足を付て更ふ遂りゝ寄付ざれゝ有繋の清記も之を悟らず五條の宿屋へ着しをりゝ最早捕吏ゝ來らじと充分ゝ油斷して熟驚せし容子ゝ探偵方より告來るゝさらむ今夜ゝ

召捕へんと豫て所々の旅宿ふ止宿させし組子を集め尚まさ同所の代官所鈴木氏へも由を告加勢を乞て密々と清記の泊りし宿を園町田に連し組子の内より十餘人の力量者をすぐり出しく各々これ〻眼潰し鈎縄なほろの他に種々の物を持せまた大布團四五帖を組子共ふ取持せ清記等の臥てをる一ト間の襖間風と閉切てソレとの下知に待設けある組子等に破落〳〵と走り入り臥したる兩人のその上へ布團を投かけ投掛て彌がうへ〻折重なり刎返さんと働らく兩人の手捉足捉取て押へ辛ふゝて兩人を高手小手〻郷濟つゝ造化精妙と打喜こび一まづ代官役邸へ引立てぞ駈走りける

第五十章　大善過て洛北に賣卜者と闘戰ふ

茲にまた大善ハ他の人々と引別れ喜十郎と侶俱に但馬〻入て丹後へ到り丹波を經て京都に出西六條に宿りを索め洛の内外を徘徊して名所おどを見物せしが或日兩人連立て嵯峨へ赴むき嵐山の景色を一覽し歸途に御室の方へ廻り山上にある八十八箇の諸堂を巡りて北野へゆかんと仁和寺の街道を東

しの方へ歩みゆくと紙屋川の少し東しに臺塀造りの一構の戸外に一個の招牌をかけこれに易の卦を畫き上の方の兩脇にハ日月を彩色し下〻ハ周易人相家相墨色の考へと筆太に記しつけその傍らに智妙院洁然と認めたり大善ハこれを見て喜十郎を顧りつゝ

大「和殿ゑ那をおんとか見たる向に龍野の加賀見に於て平太夫を欺むきて大金を騙取りし賊ハたしかに智妙院洁然とか聞たりし然るまこれなる招牌ハも正しく同じ姓名あり察する處かの者が播州より當地に来り住をるやも計がたし自然這奴がその者ならバ打殺して腹を慰んトいふを加田も打頷き

喜「如何さま屢々道中にて和尚の譚に聞居たるハ智妙院と云れたり殊に渠も修驗者とかで占卜をなしたるよーか知れバ万一その者が此處にをるやも知れがたしとゑ云充分探りしうへ果して其奴〻違ぜば見逃〻ハおるまじとて近邊の茶店に入り喜十郎は河氣なく

喜「この先の賣卜者ゑ久しく此地にをる者なるか主個は如何ある人物ぞト餘所おがら尋ぬれば茶店の老婆は眷にかゝし襷を外し手に曲ね椽の欠し木地盆を凳子の端に突き立てつゝ

老「ハイ那の賣卜者ハこの此處ろへ来てから一

月たつかたゝぬで近所のものも馴染がないゆゑ委しいことは分りませんがお
んでも大阪より下の人にて修験者らしい方なるが年齢は四十あまりで随分
怖い眼付の人また嬢さんか妾さんか知らねど至つて綺麗のよい十七八の白
歯があるので此處等邊の若い衆はその嬢の顔を見んため頼まいでも宜方位
に周易やらを聞にゆくが此人達の噂によれば主個と嬢は微塵ほども似た處
のないとやらで嬢では決してあるまい大方アレは妾であらうがアンな相の
怖い男にどういふ理由でアノ嬢か一緒に居るゝ氣が知れぬト餘所の病氣を
頭痛にする人が澤山ありまするモシ貴郎もお若いお方ゆゑなんぞら五十の
鳥目を捨るお氣で嬢さんを御覧じたら如何でもトホヽと笑へば兩人は互ひ
に面を見合しながら喜十郎も打笑ひ　喜「ハヽテ爾ぞ嬢がをらば吾儕も些と
縁談を占トて貰ひ度今須ゆけべ宅ゝ知らぬ　老「ハイ宅とも〳〵兩人のお衆
は強い外へ出きらひて門口へ顔をも出さずと日がお一日宅にばうりて何を
娯しみ居られるやらオホヽヽヽト空世辭を青中に聞て茶代を拂ひ其處を立
去り本陰へ来り　大「老婆の譚の容子でも必定這奴に相違ゐし依つて和殿は

まづ入りて渠奴を呼出し申さるべし自然彼奴が剛平ならば貧道を見ば隠れ
なんまた餘の賊にてあらんには貧道直ちに駈入て一掴みになすべきゐりそ
の有無を知るまでは戸外に隠れて窺ふべしト謀計を熟し合喜十郎は先に入
り　喜「吾儕は羈旅の者ゐるが少し易が頼み度トいへば與よりハイと返辭嬢
か出るを倩々と見るに茶店の老婆の云し通り年齢十六七也覺しくその面に
は紅粉を施こさぬれども玉の顔芙蓉の如く唇の薄紅きいまし咲初る桃櫻に
似て手を嬢のに寄せたるい土を出る春筍ことまらぬ何歟意中に怒ひしか
雙の眼ふは珍珠の如く涙を泛べ徐々と立出ていとしとやかに兩手をつゝえ
嬢「唯今主個のこれへ參れば此方へ上りて待給へトいふ物腰の尋常ならね
ば由緒ありぬべく有様ありきれども此方は賊とおもへば渠奴腸ゴかゝる婆
をゐすは必定色情もて男を瞞す賊婦の手管と知られたりと心ろにいたくこ
きを憎めど左あらぬ体にて腰うちかけ主個の出るを待ところゴ態て主個智
妙院が一ト間より出て来るを戸外ゴありて窺と見し大善は跳り入り例の錫
杖ふり騎し　大「ヤオレ奸賊たしるに聞け汝日來龍野ゐれいて平太夫を旨味

欺むき莫大の金を騙りし智妙院浩然よな貧道ハ平太夫ヱ深き因縁のある者なれバ今こそ向の返報せんト云も敢ず身打てかゝる不意のとゆゑ浩然ハ驚きながら身をかわし　浩「コハ理不盡なる和尚のゝ吾儕決して騙術なんどを働充し覺えなしト打来る錫杖の下を潜り右に開ケ左りヱ外し少しも怖れず身をかわし隙を計つて錫杖を拳ひ取んと働きしハ適れ無雙の手練なりける

第五十一章　大善雙龍ゐ會て一同乃無事を告

爾時大善ハ聲をゝけ　大「怎生ヱ加田よ和殿ハ賊婦を逃さぬやう疾々捕へ申さるべしトいふヱ加田ハ心得たりと呆れく見て居る婦を捕んと跳ゝれば身を開くまた附入りく組付を組せもあさぜヱ挑めるハ何さま覺え乃ある奴なりゼ喜十郎ハ氣を焦燥揉合るがらも捻伏んと柔術角力の秘を顯ハせど婦ハ少しもおれ身怯まず取手指手拳法の極法更ゐ雌雄ハ見えざりける大善ハこの体ゐ益々哮つく浩然を打倒さんと錫杖を風車の如くに廻し兹を詮途と闘かへども浩然ハ怯みし体ゐく前に顯ハれ後ヱ隱れ或ひハ陽炎またハ稲

妻閃り〳〵と飛違へ秘術を顯ハを武術の達人有祭の大善あしらひゐね動をれば危ふくなるを斯てハあらじと氣を激まし大喝一聲大いヱ叫び發矢と打を閃りと外し手許へよりく熊圍と組大善ハ錫杖投棄唯一掴みと揉合ども敵手も中々強力ヱて更ヱ劣らぜ捻合ひしが大善ハ最前より久しく重ケ錫杖を打ふりしとおれば稍精神の勞れしゆゑ心ばうりハ逸れども眦ケ鋭りく自由あら無を得たりと浩然秘術を顯ハし曳と云さま大善を池上へ擂と投付て逃さじこれを取て押へ急所を締て働らかさぜこの時加田も婦のためヱ膝の下に組据られ無念とあせれど姿ヱ似ぬ大力の婦なれば少しもこれを動かさぜ浩然ハ大善を組敷たるまゝ聲あらゝげ　浩「汝等ゐん等の事を誤まり我々を賊といひしゆ仔細を明さゞ許しもせんが斷く寃罪を云かゞなバ僧体ゐりぜも容赦ハせト吾儕の戸外ゐ掲げし名ハ當所へ来て付さりしこれ一時の假名ヱて素より久しく呼しヱあらぜ然るヱ龍野云々とハ一圓此方ヱ覺えゐしと云ハも大善敷られながら少しも屈せぜ大音揚　大「吾過まつく汝のために斯く組敷れたりといへども何條賊ヱ賠詰言せんや殺さバ疾く殺をべしト罵る

を聞喜十郎も嬢ゝ組伏せらきしまゝ　喜「某とても同様なり藝拙なくて賊婦のためにこのまゝ一命を取るゝとも誓く奴等ふ降るべきかト少しも恐るゝ氣色なしその時浩然嬢を顧り　浩「怎生お駒どのれ身ゝはやく其奴を縛縛て準備の大繩出しこの惡僧を縛るべしト呼はる聲ふ喜十郎が　喜「駒女と云へるゝ万が一松坂氏の嬢御おらぜや　駒「吾身を知れるゝ抑誰ぞト咎むるを大善が　大「然らば貧道を組敷しゝ雙龍齋殿なるか　雙「如何ゝ吾濟ゝ佐藤なり備ゝ和尚ゝ大善御坊か　喜「拙者ゝ加田の喜十郎ぞりト豆ひゝ名乗ばいづれも驚き兩人ゝ捕へし手を放ち助け起して雙龍齋が　雙「備ゝ大善御坊てありしゝ豫てあれなるお駒どの、譚にてゝ聞を聞ど今日斯不意ゝ憂はれてそれらの事も打忘れ尋ねざりしゝ愚かなれ併し僥倖雙方ふ怪我のおきこそ何より洪福貴僧れよび加田氏の斯無事ゝく居るゝうへゝ定めて塚原その他の人もいづ聞も異ふるともあるまじ夫ゝ就くも不思儀なるゝ貴僧の吾を知られしゝ如何ふる理由ゝや不審なれトいへゝ大善屢々頷き　大「その訝うりゝ有理至極まづ吾上より認申さんト其身の素性を概略告ゝ述めく清記ゝ逢

しことまた藤平平三郎喜十郎のうへ并びに采女を討ーこと其身衆ゝ先立く加賀見の許へ立歸り塩辛權三に欺むかれしを清記のために救はれし顛末れよび平三郎がお雪ふ逢て同道せし理由また今四是等の一同が紀州高野山へ赴むく旨を殘らず語れば佐藤をはゞめれ駒も清記お雪のうへを聞て大いゝ安堵をおー喜ぶこと一方ふらず就中佐藤ゝ只管感じ　雙「備々夫れゝ喜こばしく定めて吾濟の素性のことゝゝお雪どのより聞ゝ取れ承知ゝあるべしたれど告れば斯々云々なりと其の身の履歴を詳ゝ語り斯このところゝ住をるもお雪どの、行方及び清記ゝしの在家を索めお駒どのを渡さんためのゝ然れども知らるゝ如く吾身も向ゝ津山ふ於く多くの捕吏を惱ましたれば暫時この世を忍ばんとて聊覺えし周易を活計りの種とおし智妙院浩然と偽名を名乗りたるゝ却てこれが倖僥ゝて和尚のため身誤謬れ玆に不斗面會して人々の安否と聞くゝ之ぞ造化の配剤なるべし既ふ塚原兄妹の在家を知り上からゝいつまて此處ゝ居べきや速かふ和尚と侶俱紀の國ゝ赴むきなんト其日のうちふ住居を片付翌日未明ゝ四人の者ゝ紙屋川を出立せんと既

て用意をおしさる處へ闖哄と込み入れる捕吏の人數に備こそと大善い錫杖おツ取第一番に駐出んと犇くを雙龍齋が暫しと遮めて何とかをる次號を讀び分解すべし

第五十二章　雙龍奇計を設て捕吏の難を避る

雙龍齋は大善の逸るを制して之を遮め　雙「和尚暫し待給へ吾齋躬て斯あらんと是等の准備をおしおきたれば神臂を勞する迄もなしトお駒にソレと指揮するに畏まりぬト身を起し柱に下りし一條の繩の端を強く引むガラ〳〵と物音ひゞき自然と表の戸を締たりお駒にこれを引つけて柱の下の釘にかけおき再び右の柱ふある以前と同じ繩の端を強く引ば前の如くガラ〳〵と鳴響ひ雨戸は自然に締りけり大善と喜十郎は更ことの意を知らねばかゝる雨戸を鎖たりともいかで捕吏を防ぎ得べきト必中に訝るを雙龍齋は打笑ひ　雙「いづれも不審にあるべしがその事は後に語らん疾この隙に立去るべしト自ら真先に進みつゝ表の格子を徐に押ば暴ぢ如く開きしをイザと

て一同戸より出また元の如くにこれを鎖し足をはやめて走去しに更に捕吏は追ざりゝる徒て四人は東に走り御前通りを南にゆき千本通りを二條まで一呼吸に駐たりしがこの時既に夜ゝ明て太陽は東山にさし昇れり夫より一同伏見を發て足をとゞめて駐たるが大阪へ赴むきなば自然に敵のをらんも知れねば大和路より紀州に入んと奈良街道へ道を急ぎ玉水驛に着たるは未刻の頃と思はれたり此所にて暫時足を休め最早離も知るまじと一同は打寛ろぎ奈良へも僅かの里程なれば緩々ゆかんと佐藤がいへば大善は膝を窃め大「先生如何ある妙術ありてか一臂の力も勞せずに易々捕吏を防がれしや」貧道の淺慮では更にこれを解しがたしト眉根を顰めて尋ぬると雙龍齋はうち笑ひ　雙「イナ別に妙といふ策略にくもあらざれど向に吾齋が彼家を偖受しせつ思念るまゝ自然やこの身の不在のをりに捕吏の者が出で來らば駒女のみては危ふからめ且また仮令吾齋がをるとも前途に懲て飛器械の用意でもあらんゝは开を防ぐゝ容易からず殊に敵の追擊を避る工夫が肝要なりと思へるまゝに拙策を設けおけるとにして其法ゝ知らるゝ如く繩の端を引と

きむ表および出居の戸の自然に鎖すやうに仕かけそのすへ表の格子戸を覗音開におせしのみこの他に別に仕組もなしされど彼方に思ひがけなく戸の締りしに疑感を生じ直ちにも進み入を兩戸を破るか壁を毀つか少しは手間を取おらんその隙ふ格子を明徐かに去て元の如く鎖しおけば敵方はこれらのことを知らずして外に遁れし道もおければ床下或ひは天井などを探りをる間に遠く走らば追尾の憂ひてあらざるべし勿論看戸にも人數を分ち潜伏させんも謀られねど表の人數に家内を入ば備こそ格子を開きしをりそのうへモシや辻などに固をるとも蹴散きんに別段難き所爲にもあらずト思ひ付し淺謀も圖に中しは仕合せなれト聞て大善只管感じ　大「勇は一人の敵に對し智は万敵に對すといふ古人の詞宜なり夕貧道僅らの勇に誇り屢々無謀の事をおせしに僥倖ありてこへまでに絶て不覺を取ざりしも衆頃塚原清記のために打挫かれて敗をとれりその時も懇ろに塚原に誡められ當座は悔て居たりしにいつしかこれを打忘れ今また足下に打負く貧道の反ばざるをいたく後悔いたしたり斯いへば誇るに似たれど廣き天下に恐らくは足下と清記

を除きなば貧道の右に出る者また世に有べう思はれぞさまは塚原足下等に實に天下の豪傑にて誰かは兩人の上に出んやさるを足下等勇力慢せず常ふ智略を先にせらるはこれ真の英雄ありト頻りにその身の非を悔むを雙龍齋て打笑ひ　雙「這は甚だ過賞にて決して此身ふ當りがたし吾儕いまだ清記ぬし對面はせざれども加の人こそ智勇に富て真實の豪傑あらめそれに就ても惜むべきは清記の父の左門なり年齢は吾儕に二才長じ謙遜ふして慎み深く假ふも人の非を舉ず常に門下の者に對し禮讓を亂せしことなく能を歌ひ拙を憐れみ人に教へて更に倦ずよくその弟子を導びられしに何故皇天あゝる良士に天然の壽をかさる非命の横死を遂しめしぞこれを思へば天道是歟非歟實に頼みがさき世の中なりトいへば大善喜十郎お駒も俱に悄然と不覺に睡をうるほしける徳て四人と同家を立出奈良を投て急ぎしが程なく奈良の街に着き宿りを索めて一泊し夕餉浴湯も果せしうへなほも互ひにこれまでの過しことども語りあひ或ひは向ふ藤平に救ひしときの有様などを問ひもー告もなしあひて翌日は奈良を發足て上市村へ赴きしがまたもや途中に

て一條の騒ぎとぞ惹出せり

第五十三章　雙龍大善途中に不斗清記を救ふ

偖も雙龍齋大善等は善十郎れ駒を伴ひ上市村を過越して土田の里へ投ゝると遥う向ふの方よりして同勢二三十人許もある一手の人數が出来るそれ姿いづまも戒心嚴しく捍棒叉把頭の類を手に〳〵取る組子等が二挺の駕の前後を圍へりそのまた駕には甜漆の雲繩の網と被せしは何ざま大切の囚人ならんが如何なる者を連行るやト四人の者は不審あからも銘々大事を懷る身ゆゑ笠傾ふけて路傍に佇み故意と顔を脇へ背け面を人に見られぬやう背面になりく遣をぞを第一番の駕の中より大音に呼はる者あり「夫まなるは大善和尚と加田の兩人にあらざる歟斯いふ吾身は藤島をりト聞より氣逸の大善は偖は兩人過つて敵のために生捕れしかイデや救取べしと被し笠をかなぐり棄五十五斤の錫杖を真向に振驕し一言の詞もかけぞ駕の前後を取巻し組子を搗と撲倒せばスワ曲者ぞ侶俱に綁縛て連歸を町田の刹しき下

知の下より畏りぬト捕吏の面々驚て準備の眼潰を投付〳〵捍棒叉把頭の得物を打振て競ひ〻るを物ともせず大善は錫杖振立飛來る眼潰を右に かはし左に外しれツ取閑む組子等を當るまうせ葬立る雙龍齋に善十郎も何條少しも猶豫すべき就きも競ふ組子共を投付蹴飛し取て伏せ縱横無盡ふ撲捲るされども組子は一藩の歩卒の中より力量早業衆に優れし輩を撰み出して召連し血氣盛ん壯士なれば之等に少しも怯むことなく一命を拋て打てかゝるは最目覺き有樣なりれ駒は三人が組子等と闘かふ隙ふ懷中せし備準の短刀晃り引拔き與ふかゝりし網繩を斬んとすゝめは監察頭人の町田は目早くこれを見認走かゝつてれ駒を支へ召捕らんとおしたるを雙龍齋は組子等と戰ひながらも指添の割笄を手疾く拔出し發矢と打たる手裏劍の狙ひは外を金之亟の刹睨ふ丁とたつ痛手に怯みく二歩三歩後へ逡りしろの隙よれ駒は得たりと走りより清記ゞ乘し網桑物の網を破落零と斬て棄再び駕の戸を破り這出る清記の綁縛を斬て弃て手枷をば外さんと思ども固く鎖を下しあれど鍵のあらでは解がたく如何はせんと悶ゆるさまを大善がこれを見く組

子等を兩人に打任せて走り來り何の苦もなく鋌捻きり足枷をも引破棄れば清記は直躬と身を起しお駒の持し短刀を取より直ちに藤平の乘物を斬破り救ひ出せば大善がこれも手足にはめたりし枷を掴み碎けりその隙に雙龍齋と喜十郎の兩人は群がる組子を甲處に薙伏乙處に撲据散々に當るまかせて撲捲ればさしもに撰に撰たり〻武術の達者の捕吏共も兩人の勇に撲立られ立足もなく四途路になり散々パツと逃退たり金之亟はこの体に無念には思へどもうの身も既に傷をうけ働らくことのならざるば歯をおせど詮方なく組子共と侶俱に一丁許も逃去ぬ大善は大いに怒り 大「何國までも執念深く追かけ來る奴原ゆゑ今は一人も助々がたく渠奴等一々踏殺し再び我等を追ざるやうに後の懲誡になるをべしト錫杖とつて追んとするを雙龍齋と清記の兩人は前途を塞ぎてこれを遮め 清「和尚乃忿怒は理なれど逃なば許し遣されよ假令渠等を塵しにいたしたりとも此方に益なし夫より疾く立去るが此場に臨みて肝要なりといへども大善少しも肯ず 大「れん身等は動もすると殺は無益と云るれども生おくゆゑ斯の如くいつ〻までも追來り我

〻共を苦しむるれむ見當次第に撲殺さば後にはいろの名を聞とも厭やうになりぬべし止むは無用ぞ今回は貧道の意に從がひ一々殺さずト逃るを佐藤が之を制し 雙「和尚の詞も一理あれど能々思慮おし給へ畢竟渠等は主君命か或ひは家老重臣の指揮をうけて來りし者にて何條一己乃了簡ならんや然るを茲にて渠等を斬とも此方の穿議は止べからざる益々恨み恨を重ね遂に大事に至りなん夫より逃おべ棄置て手對ひをさば幾回でも追散をころ宜しく撲殺せずト云も敢ぞ傍ふ倒まて蠢きをる十有餘人の組子等を錫杖騎して片端より流々と打据ゆるに何かはいて堪るべきいづれも五躰は微塵ゆ碎け落花の如くに飛散たりその隙に藤平は捨れさし荷物を披き清記の佩刀吾身の刀も奪ひ返して腰に帯しさらば再び來らぬうちに高野の麓へ急くべしと六人は齋く足を速め其處を立去りける

第五十四章 六士高野山に詣て道部監物に遇ふ

偖も清記大善等六人の者は道を急ぎ夜を日につぬて走りしゆゑ翌日の黄昏に高野山の麓なる平五郎の許へ着たり平三郎お雪等は既に先日着しをりて他の人々を待居ゐるゐいづれも無事に来りしうへ雙龍齋お駒までも俱ゐ果れるとなれば雪はさらあり平三郎もその恙なかりしを喜びあふと斜ならず互ひに別れし後の事を語りあひて或ひは驚き或は感じて一盃茶時は調ぶ途ぎれもあらざりき清記はこの座に平太夫の見えぬを不審これを問ば平三郎は打領き　平「その事にて候ふなり我々當地へ着したるは五六日以前なるが叔父に仔細を語りし處然るとならばいつ何時此所へ捕吏の来るも知れねば今よりこれ等の戒心せんとく僥倖當山の吉水院は叔父の聚て出入をおしぬ阿闍梨とも懇意なるゆゑろうの事を打明て同院を頼みるば假令彼處へ洩るとも最早捕吏は差向がたしト早々阿闍梨に仔細を告げこの事を依頼たるに心能承諾せられてその人々の来りなば本院へ遣はし申べしと云きしまゝに我父は即日山へ赴むきたりまた卑生も折々は吉水院へ參りしが何分山は女人を禁じ登ることを許されねばお雪さまと我母はこの家に残り止まれり

尤も自然にこととあらば道るゝ手術は設おけりト始終の顛末を物語るに一同はこれを聞初めて安堵の思ひをなし同夜は茲に一泊して次の日はお駒を留め清記雙龍齋大善藤平平三郎喜十郎の六人は平五郎へ万事を頼み伜倶に登山し阿闍梨に遇て委しく語り救はれたしと乞たるに素より無我の聖なれば惡人たりとも乞ときは之を拒むことあざに況て此方は信義を守る誠ある士のとなるゆゑ二言と云ぜ院内に止宿すると許されしかばうの後は六人とも吉水院に止まりて半年ばかりも日を過せり然るに或日瓊越ある諸侯の許より使者の来り不日主君の御名代道野監物殿が登山ありて法會執行いたさるにつき先例の通り用意あるべしと法會の次第を述しゆゑ聚て同院にてその設けもあるとなれば畏まりぬと言承して使者を歸し准備すると日ならぜ道野監物は同勢數多と引具しつゝ吉水院へ着したり阿闍梨はこれを出迎へ客殿に請ぜ入れ茶菓を出し歓待たるが抑この監物といへる士は成吉朝臣の執權にして國中の政務を扱うふ國老なれば威權をさ〳〵主君に劣らぜ一度道野の定めしことは成吉朝臣もこれを背き給ふを得ぬ程なれば素より忠誠無

二の良士なるゝぞよく善惡邪正の道を正し主君を補佐し奉つれむ上下一和し國民い銘々ふ堵を安んじ皆太平を講ひけるとぞ阿闍梨いあれ迄幾度も監物ゝ遇をれば能く其氣質を知るものゝら清記雙龍齋大善等を伴ひて道野ゝ遇しめ　阿「這い先頃より當院ゝ寄宿いたさせおく士にしていづれも無比の豪傑ゝるが仔細ありて暫くい世を忍ばせて置候ふ長途の勞れを慰し給ふれ相手になさるべしト一々に紹介をれば監物いつく〳〵と清記等を打眺め監「何さま聖の云るゝ如く皆々俊れし豪傑ゝらめ然るを何故世を憚り斯く深山ゝ潜まゝるぞ假令他聞を憚らるゝハ深き容子のありてとも師檀の好誼ある聖の庇隱れかるゝれ身達ふれば監物必ず他言いいたさぞ若また事の次第によりてい反ぞながら某も一臂の助勢をいたすべしトいと頼しく述られしかば阿闍梨い茲ぞト衣手掻合せ　阿「日来に信義を磨るゝ國老のお詞ゆゑ貧道より申し述んト清記大善藤平反び雙龍齋平三郎喜十郎の身の上を委しく語るゝ監物ゝ大いゝ驚き　監「偖い反ゝ聞反べる英雄達ゝてありしよを某聊てれん身等の義勇ゝ俊れし舉動を聞いて慕しく思ひたるゝ僥倖ゝも當院ゝ寄

れーい何より重疊ナウ阿闍梨願くばこの人々を我藩へ賜いるまトくぞモシこの乞を容られなば斯申を監物が身にかへても人々を世の中廣死人とをさんれ是非聞容て給いるべしト聞て阿闍梨い此上おく喜び　阿「這い實に願ふ處素より異儀い候ふまゝト六人の者と顧れば大善ゝ他の者の答へを待ず進を出　大「如何ゐも院主の仰の如く成吉朝臣ゝ仕るい主君ふ於て不足をければ方々にい異議あるまじ併し貧道い知らるゝ通り一旦出家いたせしゝへ代々主君の禄を喰し身の上ふて候へば何程の高禄を給いるとても今更ゝ二君ゝ仕る心あらねば貧道のをいお請いたさじされ生死を俱ゝせんと盟ひし信友の青雲ゆゑ國許までい同道しその身の安堵を見届たゝればこの義い許容ふ預りたくと已が意中を述たりける

第五十五章

清記大善藤平等
川北剛平
監物訪る

爾時監物い手に持る扇子で小膝を打鳴し　監「アヽ有業い出家せられし身として名利ゝ望みかゝられぬ和尚ゝ心中感心いさをその義ゆらば望みゝ任せ選

俗に勸めぬども信友の誼によりてこれらの人の家に止まり其足ざるを補に
まおばこれにましたる喜びなしといふに清記雙龍齋藤平にその座に於て監
物の詞に從がひ仕官の事を承諾をまた平三郎と喜十郎にいまざ家に兩親あ
ればその許しを得るまでに猶豫あれと乞しに從ひ遠も有理の義ありとて監
物にこれを許せり徳て法會も事なく畢り道野に阿闍梨ふ暇を告げ高野山を
出立ほるに平三郎に父母の許しを得たれば直ちふ從がひ喜十郎に備中ゆふ
急ふ便りもなりがたしとてこれに清記に付添ひたり茲に於て監物に召連し
家来ふ命じ後よりお駒お雪をむかめ平太夫夫婦の者を伴ひ歸れと吩咐れた
その身に塚原佐藤藤島加賀見大善喜十郎等を同勢のうちふ加へく歸路に就
た別に道中障りもなく恙なく歸城のうへ成吉朝臣の御前へ出く法會の次第
を詳らかふ言上し備改めて申すやう　監「今回登山仕まつり吉水院にて不斗
奇代の勇士に邂逅いたし阿闍梨に乞ふて召連歸りぬト六個のうへを申しあ
ぐれば元来武備と好まるゝ成吉朝臣のとるゆあその御機嫌斜めならず成
「汗によくこそ召連来れり聞が如くばその輩にいづまも罕ふる豪傑あり夫

に就て塚原の舊藩へに予の口上をして其方より別に使者を遣なば決して異議
にあるべのらぜヨシまた少々穴かしく申し来るとも此方さへ強く返答いた
しふば夫にて事に足べきなり這にすべて其方に任ずべけれ予ふ問ずと宜
しく計ひ申すべし汗に先緩々ふもとも宜れど疾に見たきに六名の者なれ其
方の邸宅にをるとあらば速かに連来り予に逢しめよと急ぎ給へば監物に承
まれり早々下城し此事を六人に何も頻に語りしに領承し衣服を改め監物
の案内ふ從ひ本丸に登りて主君の御前へ出るに成吉朝臣に待無給ひ近く
と召せられ　成「今回道野監物の紹介により予に仕ふる段深く喜び思ふり今
後宜く寡人を輔け忠勤を勵み呉よ尚禄高に監物と談じて後より定むべし先
に當坐の引出物せんト宣まひて近士に命せ五名の者へにお時服を賜ひ大善
に僧体あれば白羽二重二巻に袈裟に袈裟せよとて御紋を織し金襴一巻をぞ下し
置る六人にいづれも有難く恩を謝して頂戴せり成吉朝臣に監物を顧りて宣
まふやう　成「予今新たにこの豪傑を召抱えたるふ付いづれもの手並が見さ
しよつて向ふ扶持しおく川村と勝負させなばこれぞ宜し汗見物ふらんが其

方は如何思へるぞ仰みせ監物承まはりこゝろに思ふ旨あれむ速かに答ふるやう監「汗は一段れ思し召しおり直ちに準備を命じおんと近士を召く早々川村を召出しまた清記等へこれを傳へ試量の場所を設けさせ剛之進の出来るを主從共に相待たり茲に川北剛平は向に支黨と牒し合せ成吉朝臣が住吉へ御社參の途中お放く故意と支黨と喧嘩をなし旨味朝臣を欺むきれわせ名を川村剛之進と偽りて首尾よく仕官の道を索め二百石の新知を戴き劍術指南の命せをうけ家中の子弟を教授せしが素より武藝に左迄にあらねど邪智弁佞の曲者なればよく一藩の士にとり入るゆゑ先生とぞ敬はれぬ然るゆ或日近士の来り主君の命にて御前に於て試量を仰せ付らるゝよし傳をさるにぞ剛平は畏まりぬと御請して窃かに近士に誰れ人と試量をなすかと尋ねし近監物の内意を得たれば近士は、故意とお相手は誰人の存ぜぬど多分御近習あるべしト何氣なく答へておき早々に立歸る剛平は心中に近習を相手の試量あらば別に懼るゝとなしあらじとお富ゆ命じ衣服を出させ手ばやく着替く下部を連直に登城しお次へ候じ御近習をもて剛之進出仕の旨を申し上ると

設けの席へ赴むくべしと監物の指揮に從ひ試合の場所へ到り御前の出座を待受たり頃て警蹕の聲と俱に成吉朝臣は上坐の設々の御座へ臨ませ給ふ剛平は平伏して御機嫌よきを祝したるについて國老監物が清記雙龍藤平大善平三郎喜十郎の六名を伴なひ出来り剛平ゆゑ對ひ斜ゆゑ上坐の方へ着坐せり剛平は何氣なくこゝを佶と眺むれむコハ度生いかに監物の後にをれるは塚原清記藤島藤平大善なるゆゑ怒地面色土の如く慄ひ顫き我を忘れ思はず其所へ平伏す清記を初め藤平も餘の事ゆゑ同じく呆れ互に顔を見合せたり

第五十六章　太守山獵を催し一家中を鼓舞す

監「各々には那者を見知申しをらるゝ後と佶し顧れは大善は清記等の答を待ず聲を激まし大「渠は播州山田峠の山賊川北剛平にて豫て貴君を我々よりお譚いたせる者にこそ云れ剛平その坐に堪らず逃んとなすを監物がソレと指揮の聲ゆゑ應ト御免し御前へ一禮し藤平が駈けよるを今はこゝまで遁れぬ處と剛平は側ゆある竹

主君をハヾめ監物も此有様を訝かりて監「各々には那者を見知申しをらるゝ後と佶し顧れは大善は清記等の答を待ず聲を激まし大「渠は播州山田峠の山賊川北剛平にて豫て貴君を我々よりお譚いたせる者にこそ云れ剛平その坐に堪らず逃んとなすを監物がソレと指揮の聲ゆゑ應ト御免し御前へ一禮し藤平が駈けよるを今はこゝまで遁れぬ處と剛平は側ゆある竹

刀取て打てかゝるを二三度身をかわし無禮者奴と呼びも敢て拳しを固めて藤平が竹刀持し剛平れ利腕を發矢と撲しかば竹刀戛裡と打落され無念と組付うの手を取り何の苦もなく捻伏せて膝下へ楚と組敷たり監物ハ再び聲かゝ監「苦しからず縛むべし」と指揮をおせば藤平ハ近士の差出を繩をとり忽地兩手を背中へ捻曲高手小手ゴ縛りあげ早々お次へ立しめたり茲に於て成吉朝臣ハ清記大善藤平等ゴ剛之進の身の上を委しく尋ねさせ給ふ丹三人ハ互ひゴ川北の一伍一什を言上す平三郎ハその側より向に吾家へ入来りし奇妙院剛驗といふる者も渠ならんかト假修驗者の顛末を群らかに言上すれバ監物ハ命せを承直ちに大目附の者ゴ命じ女房お富をハじめやし盡生と稱ふる者を悉く召捕へ嚴しく吟味を遂させしゴ果して加賀見へ趣きしハ剛平に相違おくその他これまで犯しある惡業の顛末を逐一白狀をしたれバ剛平を召出しその事を糺せし處既ゴれ富と支黨等ゴ白狀なせしうへなるゆゑ剛平も包みがさく殘らず惡事を吐たりしこれに據りて監物ハ渠等を獄舍に禁ざれたその口供を取持せ物馴し士を撰みて清記の舊主へ差遣ハし是等の

顛末を告しうへ六名の輩ハ當藩へ召抱え家臣ゴ致し候へバ念のため申し入ると云れめたるゴぞ舊主ゴハいたく前非を後悔せられ彼方よりも使者を立て清記等六名を返されたしと種々に乞れしかども成吉朝臣ハ肯容給ハぎ佞人共ゴ惑され忠臣義士を追たるハ其藩の過ちゴて此方より申し入ずバ尚いつまでも六名を憎み召捕んゑせらるべし然るを此方が抱えしとて遽ゴ返せと云越ハ甚だ以てその意と得ず斷て所望とあるとならバ兵馬を以て雌雄を決しその上おらでハ渡しがたしト大いに立腹せらるゝを監物がこれを宥め程能先方の使者を款待剛平夫婦支黨等をこの藩へ引渡し塚原の代りゴハ貴藩の名士松坂と重く採用ありたしとく使者を送り歸らしめ一件すべて落着せしかバ即ち六名を改めて成吉朝臣の御前に召出し塚原清記に二千石佐藤雙龍齋ゴ千五百石藤島藤平ゴ八百石加賀見平三郎と加田喜十郎ゴハ各々五百石宛を宛行ハ是又僧大善へハ衣食料として年々白銀三百枚宛を下しおぬる旨と申し渡されたるゴより一同いづれも君恩の難有き旨を御禮申し夫々拜領の邸宅へ移り清記ハ直ちにれ駒を婁とし妹れ雪ハ雙龍齋の媒妁ゴて藤

島の妻とおしまた平三郎へい喜十郎の妹れきぬを妻に娶せ喜十郎ゝに平三郎の叔父平五郎の娘れなみといふを嫁付せ備中片島より喜兵衛夫婦を呼迎へしゝ清記ゝ雙龍齋ゝも妻と娶れと勸めしに佐藤ゝこれを肯んぜず我身既ゝ五十おれゝ今更妻を迎へんゝ望ましき所爲おらず夫よりいづれ方々のうちゝ男子も數多出来んに开と養をひて子をせゝ可也と絶て承引ざりしにぞ爲ちゝとてそのまゝ止たり偖この年の冬の初めに成吉朝臣ゝ藩中の武備を御覽あるべしとて山獵を催さるゝ一家中の諸士の面々みな〳〵今日を曠と扮飾おの〳〵得物を携さへて御供ゝ從ゲひたりまづ一番にゝ丹藤帶刀この同勢列卒を合しく一百五十人とゞ聞えし二番ゝ大澤寛十郎手勢列卒にも八十餘人三番本多孫左衛門これも手勢八十餘人ゝの他酒井左近田邊虎之助等各々五十餘名の同勢ゝて四番五番に繰出したり六番ゝゝ成吉朝臣塚原清記佐藤雙龍齋藤島藤平加賀見平三郎加田喜十郎をゝゞめ近習小姓を前後ゝ從がへ御旗本五百餘人七番ゝ殿として道野監物手勢ゝ列卒を併して二百餘人その他一藩の壯士を合してその勢二千餘名列を亂さず繰出し聚て設けの

假家ゝ着し夫々人數を手配おし須破との號令を相圖とし法螺を吹立太鼓を鳴せゝ列卒ゝ手れ〳〵割竹もて樹間と叩きて驅立れゝ此處の溪間彼處の巖陰より猪鹿猿兎狐のたゞゝわが太鼓法螺の音に驚き割竹ゝ追立られ逃途を失おひ驅出るを鐵炮或ひゝ飛箭のためゝ擊たれて斃るゝ者多く成吉朝臣ゝこれを御覽じ御機嫌殊ゝうるゝしく瞬きもせず諸士の手柄を見物ゝして居給ひゝる

第五十七章　名を舉家を興す

僧俗六個の結局

登下片邊の溪間より八足ゝも餘りぬべき犢に比しき大野猪が太鼓の音ゝ驚きて一散ゝ駈出るを近士の人々これを見てコハ能き獲物ぞゞさんなれと銘々所持の鳥銃の筒先揃へてきつて放せどその猪の猛勢ゝ怖れて拳しの狂ひしやまたゝ年經古猪なれゝ彈丸の貫徹ぬものゝやありけん更ゝ斃れずまする〳〵嗜り木の根岩角のきらひふく牙にかけて刻付〳〵成吉朝臣の立せ給ふ御假屋目蒐て駈来る塚原清記ゝこれを見て携さへをれる九尺柄の手鎗を取

て立對ひ駈来る猪を待かけたり猪は素より相手を撰まぜ牙をならして飛蒐るを清記は閃りと身をかはし手鎗をとつて猪の脇腹グサと突たるに年經猪ゆゑその全身は松脂と小石とにて數年の間練固め恰かも金鐵と比しければ更に鎗の穂はたゝず宛ら大石に當る如き響きのみして刎返せりコハ口惜と鎗取直し走りかゝつて耳の根を發矢と突けばこの處は少し皮の薄うりけん中身の鎗の千段巻までグサと徹れど野猪は更に怯む氣色をくゴウと哮つて身をふるへば鎗の柄は中途よりポツキと折て柄のみとなりぬ清記はこれを投棄て腰刀を拔き放し狂ひ歩く猪に追付肛門と覺しき處ろを柄も徹れとさし貫ぬけばさしも年經る猛獸も二ケ所の痛手に少し弱れど頻りに傍の樹木を引掛哮りは更にやまざりし清記は得たりとろの脊ゆ飛乘かの吉光の名刀を逆手にとつて怒毛を弓手に掴みて耳の根を力まかせに突徹せば今は猪も堪り得ぜ揺と倒て動うざりし主君をはじめ見物の諸士はこれを打眺め賞に天晴の働らきゆて今日第一の手柄なりと感ぜる聲は山嶽も揺ぐばかりに見えたりける僧大善はこの日のお供にお列外に從がひ来りてれ候屋に在た

るが清記の柄手を一見して堪りがたくぞ思ひけん法衣の袖を脊中へ寒例の錫杖つき立て獲物やあると見廻を處に遥かの向ふに列卒どもが何歟囂々罵噪ぎ一同にワツと逃出すは何さま獲物に相違なしと錫杖小脇にうい込て一文字に走りゆき倍と其方を眺むれはこれぞ一頭の熊なりけりコハ願ふところの獲物なりと噪ぐ列卒を追ひ除けて錫杖騎して打つてかゝるゆ熊は少しも驚ろかず直躬と立て兩足ひろげ飛び蒐らんぞ有様に大善は打ち笑ひ小賢しき畜生奴と呼びも敢ず真向より微塵になれと打れろすを熊もまた眼てぞく閃りとかはして錫杖を宙ゆて楚と引かゝえ奪ひとらんと強く引大善は事ともせぜそのまゝ其處へ押伏んと金剛力を顯はして曳々聲にて揉合しが熊は素より大力なれば敢て少しも倒されぜ哮りに哮つく爭そひたり主君をはじめ山上に並居る諸士はこれを見てアナ怖しの勇力ぞと瞬きもせぜ打目守大善勇氣ます〳〵加はり曳奪はんと爭そふ熊に先分の力と入させ曳と云さま手に持る錫杖を突放せば機みをうたれて揺と轉ぶ熊のうへに走りかゝり首筋掴んで鉄拳振上捻伏てつゞけさまに十五六力重に任せて撲しかむさし

もの熊も大いに弱り手をふ勢ひ脱果て逃んともがくを地上へ押付列卒と招きて藤蔓を數條とらせて四足を縛り生擒とおしたるに實凄まゝき働きなり大善に列卒に命じ縛りし熊を假屋へ昇ぎゆけと云たるにいづれも熊の哮る聲に恐るをなして近寄得ず備々弱き奴原かなと笑ひながら錫杖を括し四足の間に差し入れ何の苦もなく引昇ぎ徐々と山上へ登り来りて生捕の熊を主君の御覧に供一呼吸つぎ居たりける所る處に弓手なる一叢茂りし木の間より雌雄の鹿が駈出るを雙龍齋が佶と見て携さへし弓箭をとりキリ、と番ひてよツ引しぼり矢頃をねらつて兵と射るその箭少しも過たず雄鹿の平首裏かきて羽ぶくら責て立たりし佐藤に透さず二の矢をとりとーふつときつて放てばこれも狙ひに崩ぜして跡なる雌鹿の太腹を管深く射拔きたれば何うに以て堪るべき雌雄ともに其場へ倒れ起もあがらで死したるにいと目覺しき弓勢ありしこの他藤平々三郎喜十郎の三人も比類なき働らきして一番の眼を驚かせば成吉朝臣に滿面に大悦を顯はし給ひ傍へらなる豎物に成一今よりはじめぬとながら其方の鑑定で推擧せし六名の輩に實に當時無双の士

にて予も甚だ滿足いたすト御感賞ありしかば道野も大いに面目を施こして悦びたり恁て既に日も入て暮間近くなりしゆゑ成吉朝臣に數多の獲物を列卒人足に擔はしめろの日の夜ふいりて御歸城あり翌日御供の面々を殘らず召され夫々の功に應じて御賞與あり尚この上にも武術を勵み自然粹のあらん日ふに武功を天下に顯すべしト宣まひければ一同に畏まりぬと御請せり其後程おく塚原および藤島加賀見加田の家に男女子寶影多を舉しを雙龍齋に清記の次男と藤平の次女を乞ひこれを其身の世繼となし五家ともにます〳〵榮えりまた大善に三四年當地に遊びとりたるが一日遽かに五人に辭しまだ巡り殘りたる國々を遍歴せんとて止むる者の袂とゝらひ飄然と立去りしがその行處を知る人おしと聞がまゝに潤色なせしも素より拙おき筆のすきな看官の見倦も悟らで新長々しく書つゞりぬ

近世奇聞　野飼駒　大尾

明治二十二年九月七日印刷
同　年九月十二日出版

編輯兼發行者　東京京橋區大鐵町一番地寄留　花井卯助

印刷者　同　神田區今川小路三丁目一番地　田口高朗

專賣所　東京々橋區大鋸町一番地　共和書店

同　大阪東區安土町十一番地　積善館

京都大賣捌所　京都三條寺町西入　山中勘次郎

共和書店稗史小說發行略目

一 二人大名　西洋綴美本 全一冊
一 大丸騷動　綾錦都花衣　全
一 一讀三嘆　當世書生氣質　全
一 牛頭淺吉輪回火車　三途阿岩　全
一 朧夜の花　全
一 青年の友　全
一 花廓毒婦の美代吉　全
一 砂中の黄金　全
一 造化妙理　男女交合新論　全
一 清水觀音片輪車　通夜閑書　全
一 奈良屏風の張交　四扇　全
一 善惡二松譚　十人十種　全
一 畫夜帶　全
一 躭與正夢草紙　黑白　全
一 床飾菖蒲刀　全
一 色情淵刃傷譚　全
一 霜夜の松　全

一 初嵐蘆間蟹　全
一 北時雨由縁合傘　全
一 花月草紙　全
一 情談比翼塚　全
一 色競松與紅葉　全
一 尊王異聞雪月花　全
一 繫駒奥州唄　全
一 緑林　全
一 大和文庫花魁茗八總　全
一 偽勤王眞佐羅繁評判加納實傳　全
一 掛的千筋矢　全
一 近世奇聞野飼駒　全
一 色競雪間鶯　全
一 昔頑固の十二刻改　今開化の廿四時間　胸時計雜聞書　全
一 明治擬律大鷹裁判　全
一 初日出峯織輕風　全
一 河千鳥　全
一 菊の籬　全
一 籬の飼鶯　全
一 春遊雉子歡聲　全
一 鐵神刑雙龍奇談　由來記　全
一 紙鳶柳縋糸　全

一三ツ巴　仝
一相生むすび　仝
一松間の月　仝
一純金指環　仝
一他生の縁　仝
一枯野の月　仝
一情の分櫛　仝
一鴻池山中成太郎實傳　仝
一眞如の月　仝
一佐賀の夜嵐江藤新平　仝
一秋錦頽風露　仝
一楠家の由緣紫威毛　仝
一新式近江八景　仝

一春の色野山花　仝
一人間福初山踏　仝
一猿猴桀次二葉廼鏡面玉兎お久　仝
一雪の夜ばなし　仝
一瀧の白糸　仝
一實說名古屋帶　仝
一大鹽三津廼白波異聞　仝
一花茨露面影　仝
一雲の行末　仝
一牧の月影　仝
一都育東寫絵　仝

持別大賣列所

東京淺草區三好町　大川屋
仝日本橋區本石町　上田屋
仝區元四日市町　金泉堂
仝區通三丁目　金櫻堂
仝區通四丁目　春陽堂
仝　堺売町　鶴辨社
仝京橋區大鋸町　自由閣
備前岡山中之町　森清造
安藝廣島泉町　水庫三郎
周防山口　宮川臣吉
馬関赤間町　西尾商店
伯耆米子尾高町　今井兼文
仝　法勝寺町　亀井弘文堂
出雲松江天神町　川岡清助

出雲松江天神町　大戸利七
仝大橋詰　園山喜三右衛門
阿波徳島新町橋詰　黒崎源助
仝通町三丁目　坂井萬吉
讃岐高松丸亀町　開文舎
仝琴平内町　箸方儀三郎
仝丸亀富屋町　塩田保藏
仝丸亀塩飽町　開文舎
仝豊田郡觀音寺　安藤國造
伊豫松山港町三丁目　世良書籍店
仝　港町三丁目　向井藏次郎
仝　港町三丁目　土肥與平
仝　今治新町　増戸伊兵衛

仝　宇和島本町五丁目　毛利源造
紀伊和歌山本町二丁目　平井文助
伊豫八幡濱新町　高橋傳吉
土佐高知種崎町　澤本駒吉
薩摩鹿兒島六日町通　吉田幸兵衛
仝　中町　山元正治
仝　仲町松山通り　池田保輔
仝　朝日通り　冨山仲吉
仝　金生町通り　青木泰次郎
越中富山西町　大橋甚吾
仝　東四十物町　中田書店
仝　大田口町　守川吉兵衛
仝　越前町　田村螢雲堂
仝　砂町　眞田善次郎
仝　高岡　車次郎七
越前勝山　南部平兵衛

越前福井　品川爲吉
仝　酒井安兵衛
加賀金澤尾張町　雲根堂
仝　上堤町　野島信吉
仝　殺安江町　近八郎右衛門
仝　安江町　近田太三郎
仝　南町　池善平
仝　　柳田岩次郎
仝　　石井久三郎
尾張名古屋本町三丁目　川瀨代助
仝　玉屋町三丁目　片野東四郎
仝　本町通鐵砲町二丁目　三輪文二郎
伊勢津　川島九右衛門
仝　京口町　松田卯三郎
仝　亀山　渡邊東五郎
近江國長濱御堂前　中村藤平

野州宮津本町　南波庄兵衛
仝　峯山　上島長助
石見濱田　安達發太郎
豐前仲津古博多町　極津壽平
仝　小倉魚町　中島宇助
豐後大分京町　山川正三郎
仝　竹町　甲斐治平
豐後臼杵町　甲斐文七
筑前博多中島町　林斧助
仝　麹屋町　高田芳太郎
仝　博多浜町　右田喜九郎
仝　福岡橋口町　山崎登
仝　笠子町　江藤正證
筑後久留米米屋町　菊竹書店
仝　三本松町　赤司平助
仝　米屋町　小柳幸二郎

筑後柳川濱高町　扣浦卯三郎
仝　三池　三池書館
肥前長崎引地町　鶴野常藏
仝　東濱町　安中盛文堂
仝　酒屋町　安中虎屋號
仝長崎今銀治屋町　瀨川平三郎
仝　佐賀白山町　河内莊助
仝　佐賀新馬場　博聞社代理店
肥後熊本新二丁目　長崎次郎
仝上通町三丁目　樂善堂
仝　新三丁目　永田義八郎
仝　上通三丁目　赤井島卷堂
仝洗馬町上壹丁目　齋藤陳太郎
仝　上通り町三丁目　齋藤源八
仝　下通り町三丁目　長山喜三郎
仝　夏越橋町　石原知一

肥後熊本上通り町　河島又次郎
仝　高瀬本町　浦田書店
仝　山鹿湯町　三益屋
仝　八代細工町　瀧本時昌堂
仝　八代本町　岩本理平
仝　菊地郡限府町　中島屋
仝　上益城郡御船町　河邊傳吉
肥前諫早町　高橋蘇平
對馬厳原　茂村源助
豐前小倉　卒島倉吉
豐後鶴崎　岩津要藏
豐前仲津　野依暦三
鹿兒島伊集院　安樂德藏
日向都城　高野助右衛門
仝　延岡新小路　速山貞一

超後新潟古町通二番町　井筒駒吉
仝　本町通八番町　三條屋又吉
仝　本町通九番町　越中屋治郎八
仝　長岡表二之町　長谷川彌一郎
仝　柏崎下町　常山書店
仝　新發田立賣場　高砂屋長次郎
仝　高田稲荷鍋屋町　室直三郎
仝　仝　杉田貞二郎
仝　仝　佐々木俊治
仝　吳服町　本田書店
仝　仝　伊勢安書房
陸前仙臺本町　野崎九兵衛
陸奥弘前土手町　津田敬助
北海道札幌南二條　石塚喜三郎
仝　仝　白鳥宗次
仝　小樽現町